

18世紀フランスのリベルタン小説：『哲学者テレーズ』

関 谷 一 彦

1. はじめに

リベルタン小説とは何なのだろうか？ ポルノグラフィックな小説とどのように違うのだろうか？ 『18世紀のリベルタン小説家たち』(*Romanciers Libertins du XVIIIe siècle*, Pléiade, Gallimard, 2000)の「まえがき」において、ラゾウスキー(Patrick Wald Lasowski)はリベルタン(libertin)の語源をローマ時代の「解放奴隷の子」であるlibertinusに由来することから書き起こし、その意味の変遷をたどっている¹⁾。モンテーニュやコルネイユでは「リベルタン」という語は、もともと身分の低かった者がその身分のモラルを残しているという悪い意味で使われていたが、17世紀後半になると放蕩と異端とが結びつけられてこの語に付け加わった。そして18世紀摂政時代(Régence)に入ると放蕩の意味で使われるようになる。こうした意味をもつリベルタン小説の枠組みは、フランスで18世紀のリベルタン小説が1990年以降まとめて出版されるようになったので、それらが役立つ。とりわけ、『18世紀のリベルタン小説』(*Romans libertins du XVIIIe siècle*, Robert Laffont, 1993)には11人の作家の12篇の作品が、また『18世紀のリベルタン小説家たち』(*Romanciers libertins du XVIIIe siècle*, Pléiade, Gallimard, 2000)に、重複を含め10人の作家の12編が収められているので、リベルタン小説の概要を窺い知ることができる。リベルタン小説は現代風に言えばポルノ小説であるが、それは性行為を描くあるいは暗示するという点にのみ当てはまり、実際は似て非なるものと言える。そもそも18世紀では、ポルノグラフィはレチフの作品に見られるように「娼婦について描かれたもの」という語源的な意味をもっており、またポルノ小説というジャンルもなかった。ではどのように違うのだろうか？

リベルタン小説とポルノ小説の違いは、リベルタン小説を定義づけるためにも重要な問題である。しかしながら、リベルタン小説と言っても先にあげた二つの選集の作品も多様であって、クレビヨン・フィスの繊細で暗示的な性表現から、『哲学者テレーズ』の具体的な性行為の記述までその違いは大きい。またポルノ小説と言っても同様にソフトポルノからハードポルノまであり均一ではない。したがってそれぞれのジャンル内部の差異を認めようとして両者の違いを考える必要がある。

1) Patrick Wald Lasowski, *Romanciers Libertins du XVIIIe siècle*, Pléiade, Gallimard, 2000, pp. IX-XVI.

われわれがポルノグラフィックな小説という場合、そこには性欲を掻き立てることを目的とした小説であることが前提とされている。もちろんリベルタン小説も読者の性欲を掻き立てることもあろうが、それだけが目的ではなく、性を通してキリスト教や教会を批判する役割を果たしている。そもそもリベルタンは17世紀においては既成のキリスト教信仰に反逆した人たちに向けられた用語であり、おまけに18世紀の時代が進むにつれてこうした批判は強化され、リベルタン小説の数も増えていく。それゆえにリベルタン小説は「リベルタン」という語がもつ歴史的な概念形成において、本来的に反逆的であり、教会権力や国王権力に批判的な思想を含むものと位置づけるべきであろう。リン・ハントは「政治的ポルノグラフィー」と「非政治的ポルノグラフィー」という語を使って性をテーマにした作品を分類しているが²⁾、彼女の言う「政治的ポルノグラフィー」がまさにリベルタン小説に含まれるものである。彼女も指摘しているように、「政治的ポルノグラフィー」は1790年代がピークで、1830年代までにこうした批判精神を失い、現代版ポルノグラフィーが成立する³⁾。現代版ポルノと18世紀の「ポルノグラフィー」がその質を異にすることをはっきりとさせるためにも、「ポルノグラフィックな小説」ではなくて「リベルタン小説」という語を使いたい。では、こうしたリベルタン小説は18世紀を通してどのように読まれたのだろうか？ 思想的に何らかの影響を与えたのだろうか？ さらにまたフランス革命に何らかの影響を与えたのだろうか？

ロバート・ダーントンは18世紀には取引上の書物の呼び名として「哲学書」というジャンルがあったことを明らかにし、その「哲学書」を「猥褻、反宗教あるいは治安攪乱的な書物」と定義している⁴⁾。ダーントンは『革命前夜の地下出版』の末尾を、「『哲学書』は、自らに固有の言葉で、社会の土台を掘り崩し、世界を転覆させることを大声で求めたのだ。反体制文化は文化の革命を求めた。——そして1789年の呼び声にこたえる準備ができていたのである。』⁵⁾と締めくくり、「哲学書」がフランス革命を準備したと結論付けている。「哲学書」に含まれるリベルタン小説が、フランス革命にどのような影響を与えたかについては、リベルタン小説の全体像をより精緻に分析しなければならない。そのためには個々のリベルタン小説を読み解いて、その中に見られる性と哲学を分析することが不可欠だ。また、読者がどのようにリベルタン小説を読んだのかも問題となる。こうした問題を視野に入れながら、本論はリベルタン小説の中でもベストセラーにあげられる『哲学者テレーズ』（以下『テレーズ』と略す）を取り上げて、まずこの作品がもつ意味を考え

2) Lynn Hunt, *The Invention of Pornography: Obscenity and the Origins of Modernity, 1500–1800*, New York, Zone Books, 1993, p. 313 (邦訳、リン・ハント「ポルノグラフィーとフランス革命」『ポルノグラフィーの発明』、ありな書房、2002、p. 327)。ただし、彼女は「政治的ポルノグラフィーと非政治的ポルノグラフィーを分かつことは必ずしも容易なことではない」と付け加えている (*ibid.*)。

3) *Ibid.*, pp. 302–303 (邦訳、pp. 316–317)。

4) Robert Darnton, *The Literary Underground of the Old Regime*, Harvard University Press, 1982, p. 122 (邦訳、ロバート・ダーントン『革命前夜の地下出版』、岩波書店、2000、p. 160)。

5) *Ibid.*, p. 208 (邦訳、p. 269)。

てみたい。そして、この作品に入り込んでいる哲学、またこの作品が後世にどのような影響を与えたのか、さらには性と哲学の結びつき、あるいは欲望と理性の結びつきについて18世紀に起こった地殻変動を考えてみたい。こうした作業を通して、リベルタン小説とフランス革命との関係という大きな問題にアプローチすることが可能になるだろうからである。

しかしながら、リベルタン小説が18世紀にどのように読まれていたのかを明らかにするのは難しい問題を含んでいる。ロバート・ダーントンが「ルソーを読む」の中で、「何を読んでいたか」という問題から、書物を「どのように」読んでいたかという問題へとシフトしながら、一読書ランソンがルソーの著作をどのように読んだのかを明らかにしようとしたが³⁶⁾、それはルソーという特殊性に負うところが大きいと思われる。資料が残されていたことも大きいですが、ルソーを読むようにリベルタン小説が読まれていたとは思えない。しかし、読者がどのような関心をもって『テレーズ』を手にとったかははっきりしている。その関心は二つに分けられるだろう。一つは、性への関心であり、もう一つは哲学的な関心である。現在残されている18世紀の『テレーズ』の版については後述するとして、その中にはエロティックな挿絵入りのものが多くある。また挿絵がないにも関わらず挿絵があるように表紙に書かれているものもあり、性への関心が『テレーズ』の読者を惹きつけたことはまず間違いない。それとともに哲学的議論が当時の読者に重大な関心を喚起したこともまず間違いない。『テレーズ』には強烈的なキリスト教批判が見られるし、唯物論的思想も見られる。「発禁本」(Enfer)になったのは、むしろ後者の理由からではないかと思えるほどだ。ここには、さまざまな思想が流れ込み、また『テレーズ』を経由してさまざまな思想が生み出されていく『テレーズ』が果たした役割が見られる。例えば、ラ・メトリの『人間機械論』の考えが入り込み、『テレーズ』を経由してサドの『閨房哲学』に引き継がれている思想の流れが読み取れる。

では『テレーズ』における性と哲学の結びつきをどのように考えればいいのかのだろうか？性と哲学はフランス18世紀にたまたま結びついたのであるか？それともそこには結びつくための普遍的な要素があったのだろうか？本論ではこうした疑問も『テレーズ』を通して考えてみたい。まずは少し煩瑣になるが『テレーズ』の書誌学的な考察から入りたい。というのも、今なお初版本の確定に関して疑義があるからである。

2. 初版本および作者の問題

まずこの『哲学者テレーズ』は書誌学的にきわめて取り扱いにくい作品である。それは非合法というリベルタン小説の特徴とも言えるが、とりわけこの作品は、初版本の決定および作者についてミステリーを残している。フランソワ・ムローは、自ら編集した『テ

6) ロバート・ダーントン『書物から読書へ』収録の「ルソーを読む」、みすず書房、1992、p. 203以下参照。

レーズ』の序文でこれらの点について詳しく述べているが、彼は詳細な実証的研究から、1748年に出版されたものにリエージュ版とパリ版の二つがあり、初版本はパリ国立図書館にある Enfer 402（パリ版の可能性）ではなく、Enfer 403（リエージュ版）だと主張する⁷⁾。やや煩瑣になるが、出版経緯についての概略を見ておくことにしよう⁸⁾。

『テレーズ』の出版に大きな役割を果たした人物がいる。その名をモンティニイ (François-Xavier d'Arles de Montigny) といい、ブザンソンの貴族で、高利貸し事件に関わって1744年に生まれ故郷に追放されるが、1745年にフランス軍の会計監査官として再び現れる。当時フランスはオーストリアとの王位継承戦争の真最中で、モンティニイはリエージュでスパイとして働いていた。そのときに彼は「哲学的」作品をフランス軍の兵士たちに売ることを計画し、3000～4000冊を印刷するための資金を準備する。彼はリエージュの印刷屋でパリ出身のドゥ・ロルム (Jacques de Lorme de la Tour) と連絡を取り、またパリで印刷の仕事ができる人物を探してボシュロン (Louis-François Boscheron) を雇い入れ、1748年6月にボシュロンはリエージュに向かう。この計画の中には、『カルトゥジオ会修道院の門番の物語』 (*Portier des Chartreux*) の再版と『テレーズ』の初版の印刷を目的とすることが知られている。モンティニイはオリジナル原稿を所持していたが、それがどのようにしてモンティニイの手に落ちたかは謎である。印刷の仕事は10月に終わり、ボシュロンはパリに戻る。しかし、1748年10月にオーストリアとの戦争は終結し、フランス軍は南オランダから引き上げてしまい、モンティニイが狙った客はいなくなってしまう。ドゥ・ロルムはパリへの移送を計画し、11月初旬から販売を始める。しかしながら、こうした解決策は『テレーズ』で儲けようとしていたモンティニイには気に入らなかった。そこで彼はボシュロンにパリで『テレーズ』の印刷屋を見つけるように指示をする。この頃、印刷に関わる業界にいたボナン (Bonin) とラ・マルシュ (La Marche) は警察のスパイとしてモンティニイを監視する。また猥褻な版画が発注されていたこともわかっている。モンティニイはラ・マルシュに販売を依頼し、『テレーズ』は宣伝にうまくのる。1748年12月にテキストと版木の印刷は終了し、『テレーズ』は「みだらな挿絵」で飾られた二巻本として世に出ることになる。モンティニイは1400部印刷し、それを30リーブルで売ろうとしたが、その値段はその種の本の通常価格の10倍だったとのことである。1749年2月1日、モンティニイはボシュロンとともに逮捕され、パリ版の大部分が押収される。モンティニイは1750年8月に釈放されるが、ボシュロンが釈放されるのはそれからかなり後のことである。

以上のことから、1748年出版の『テレーズ』には二つの版がある。技術的には同時に印刷された『カルトゥジオ会修道院の門番の物語』に類似した挿絵がないリエージュ版、そして少なくとも11枚の挿絵のあるパリ版の二つである。

7) *Thérèse philosophe*, par François Moureau, Publications de l'Université de Saint-Etienne, 2000, pp. 13-14.

8) 「初版本および作者の問題」はムローの「まえがき」に負うところが多い (*ibid.*, pp. 7-32).

ムローはパリ版が手書き原稿をもとに印刷されたもので再版ではなく、第2版であるとして、オリジナルはリエージュ版と断定する。リエージュ版とパリ版とのもっとも大きな違いは、リエージュ版には挿絵がないのに対して、パリ版では挿絵があることである。また、リベルタン小説が書誌学的に取り扱いにくい大きな原因は、海賊版が多いことであるが、モローは挿絵のないものは偽造版だとしている。確かに、例えばリヨン市立図書館所蔵の1797年の出版年が入った『テレーズ』には、表紙に挿絵入り (avec figures) と書かれているにもかかわらず挿絵がない⁹⁾。これなどは偽造版と考えられるだろう。

さらに『テレーズ』の作者についてもよくわからない。ディドロからダルジャンスまでさまざまな意見があるが決定的な証拠はない。デュプリロは『ダランベールの夢』の中のダランベールのオナニーの場面とテレーズのオナニーの類似からディドロ説を主張する¹⁰⁾。それに対してロトリーは、ディドロを作者とする主張は事実関係が合わないとして退けている¹¹⁾。確かに、オナニーの場面の一致というだけでは、論拠として弱い。また、ムローはモンティニ説を彼の手紙と「回想録」の文体から『テレーズ』の作者とは無関係であるとして退ける。そこで登場するのがボワイエ・ダルジャンス (Jean-Baptiste de Boyer, marquis d'Argens 1703-1771) だ。

作者に関して、ダルジャンスを想定する場合に必ずといっていいほど持ち出されるのが、彼の父がエクスの検事総長で1731年の後述する「カディエールとジラルルの訴訟」(procès de Cadière-Girard) の時期と一致するというものである。息子ダルジャンスは父から詳細な事件内容を聞くことができる立場にいたというわけである。しかし、それがダルジャンス説を決定付けるわけではないだろう¹²⁾。また一方、ダルジャンス説を支えるのはサドが『ジュリエット物語』の中で好色本を比較しながら、『テレーズ』を評価して、「アルジャン侯爵の筆になる魅力的な作品『哲学者テレーズ』」¹³⁾と書いていることによる。とくに二人がプロヴァンス出身で、サドはダルジャンスについてよく知りえる立場にいたことは間違いない。とは言っても、ダルジャンス説が有力ではあるが、決定的ではない。しかし、モローは最近のギュルベール (Guillaume Pigéard de Gurbert) の研究を取り上げて、ダルジャンス説を有力視している¹⁴⁾。それは、1) ダルジャンスのカディエールとジラルル事件についての『回想録』(1735)の記述がほぼ同じ、2) 「忘れなさい、そして身を委ねなさい」という書き方が『秘教徒の手紙』(Lettres cabalistiques, 1737)の記述と同じ、3) 社会関係を壊さない放蕩の賛美は『中国人の手紙』(Lettres chinoises, 1739)

9) *Thérèse philosophe, ou mémoire pour servir à l'histoire de D. Dirag et de Mlle Eradice*, Nouvelle édition avec figures, Première partie, Au Bazar, 1797, (Chomarat A 10548). この本には最後に《Jouissance》という詩が添えられている。

10) *Thérèse philosophe*, Fac-similé de l'édition de Paris (?), vers 1780, par Jacques Duprolot, 1980, p. XXVIII.

11) *Thérèse philosophe*, par Florence Lotterie, Flammarion, 2007, p. 12

12) ロトリーも「彼が関連書類を見られる特権的な場所にいたとは考えにくい」として単に父親がエクスの検事総長であることを理由にアルジャン説をとることに疑問を呈している (*ibid.*, p. 14.)

13) *Histoire de Juliette, Sade Œuvres*, t. III, Bibl. de la Pléiade, p. 591.

14) *Thérèse philosophe*, par Guillaume Pigéard de Gurbert, Arles, Actes Sud, 1992 (Cf., Moureau, *op. cit.*, p. 21).

の21章に見られる、4) さまざまな哲学的主張(快樂の教育、情念による道德意志の解消、快樂による自己の解脱、思考に対する現実の優越)がダルジャンスの考えと一致するというものである。こうした実証的研究が作者ダルジャンス説を強固にしているが、作者に関してはおそらく何らかの新資料でも出てこないかぎり、断定することは不可能である。

では『テレーズ』はどのような内容の作品なのであろうか。性の描写と哲学的議論が交互に現れるこの作品は18世紀のベストセラーになるほど読者を惹き付けた。その理由はいったいどこにあるのだろうか? まずはテキストそのものを見てみることにしよう。

3. 作品の内容

『テレーズ』の構成は第一部と第二部に分かれていて、第二部はさらに「ボワ=ロリエ夫人の物語」と「ボワ=ロリエ夫人の話の終わりとテレーズの話の続き」に分かれている。第一部も章分けこそなされていないが、「ディラグ神父とエラディス嬢」の物語と「T…神父とC…夫人」の物語に大きく分けることができる。タイトル副題が、Enfer 402も403も「ディラグ神父とエラディス嬢の物語の理解に役立つ回想録」(mémoire pour servir à l'histoire de D. Dirrag et de Mlle Eradice)と書かれていることから、作者は当初「ディラグ神父とエラディス嬢の物語」を書こうと意図したに違いない。それがどのような経緯で他の物語を付け加え、発展させられることになったのかは定かではないが、物語自体はきわめて独立しており、自律した物語を主人公のテレーズが彼女の庇護者で愛人である伯爵に語るという枠組みで、物語の一貫性と統一をはかっている。では副題に見られる「ディラグ神父とエラディス嬢の物語」とはどのような物語なのであろうか?

この物語は、すでに触れたカディエールとジラルルの訴訟(procès de Cadière-Girard)をもとにしている。エラディス(Eradice)という名はカディエール(Cadière)の、ディラグ(Dirrag)という名はジラルル(Girard)のアナグラムである。この訴訟はドール出身のジラルル神父がトゥーロンの告解者であるカディエールを惑わして強姦し、墮胎させたとして1731年に起こされ、フランスだけでなくヨーロッパ中で大スキャンダルになった事件である。この裁判の背景にはイエズス会とジャンセニストとの深い対立がある。『テレーズ』の中でも、ディラグ神父が属するのがイエズス会、エラディスの恋人となった若い司祭がジャンセニストで、彼が事件を暴くという物語設定になっている。そして、この事件をさらに深く理解するためには、1730年に起こった「痙攣派」と呼ばれるジャンセニストたちの運動を知っておく必要がある。

この運動の発端は、1730年11月6日に体に障害をもつアンヌ・ル・フランク(Anne Le Franc)という女性が、パリのサン=メダールにある奇跡を起こすという評判のパリスの墓前で、障害が治ったというところにある。1731年3月6日、彼女はその報告書を公証人

に預け、それが『奇跡についての論考』(*Dissertation sur les miracles*)というタイトルで、地下出版を営んでいたシャルル・ロベール・ベルチエ (Charles Robert Berthier) によって出版される。この挑発がパリの大司教の逆鱗に触れ、大司教はパリスの墓などへの礼拝を禁じ、医者たちに証言を求めた結果「ごくありふれたヒステリー疾患」と結論づける。それに対してジャンセニストたちは、法廷闘争に持ち込み、それが政治問題となった運動である。1731年の夏からサン＝メダールは群集に占拠され、神秘的な痙攣が頻発し、奇跡的な病気の治癒が相次いだ。1732年1月27日にサン＝メダールの墓は閉鎖されたが、その運動は下火にならず、1750年ごろまでパリスの墓に隣接する教会でパリス詣でが続いたと言われている¹⁵⁾。『テレーズ』のなかで、「あなたもあの有名な聖痕の仲間なのかしら？」¹⁶⁾ (p. 108) とC…夫人がテレーズに述べるくだりがあるが、「あの仲間」とは「痙攣派」を指していることは間違いない。また、ディラグ神父がエラディスをうまく利用するのも聖痕が現れるという奇跡であることも当時の背景を映し出している。

では物語に戻ろう。この「ディラグ神父とエラディス嬢の物語」では、テレーズとエラディスの心を占めていたのは「聖女であるという評判を得ることであり、数々の奇跡を行なうことができるという途方もない欲求をもつこと」(p. 87)であるが、ディラグ神父は彼女のこうした欲望を自らの性的欲望に利用することになる。つまり、エラディスに聖痕が出たと信じさせ、あともう一息で聖女になれると吹き込むことで彼女の無垢な信仰心を巧みに利用して、聖フランソワの紐と偽った自らの男根をエラディスの性器に挿入する。テレーズは小部屋に隠れながら二人の行為を一部始終覗き見するという設定になっている。テレーズは、自分が覗き見た二人の聖なる行為＝性行為を、余計なものを省いて精確に描写した後で、この物語に注釈を加える。

「何という卑劣なやり方で、この坊主は自分の告解者をみだらな目的に導くのでしょうか！ 彼は聖女になりたいという彼女の思いに火をつけ、肉体から精神を引き離すことによってのみ聖女になれると彼女を説得するのです。そこから、彼は強力な規律によって試練を受ける必然性へと彼女を導くのです。それは、おそらく勃起神経が衰えた一物を立たせるための、偽善者の趣味の強壮剤になる儀式でした。」(p. 99)

テレーズはエラディスとディラグ神父の生い立ちを語り、彼らの性格から二人が近づくのが必然であったかのように描いている。またディラグが昔の告解者を呼び寄せてエラディスに聖痕をつけさせたこと、張形を聖フランソワの紐とエラディスに信じさせるが、

15) このあたりのことはロトリーの「前書き」に詳しい (Lotterie, *op. cit.*, pp. 17-18)。

16) 引用はロトリー版 (*Thérèse philosophe*, par Florence Lotterie, Flammarion, 2007) を用いたが、テキストはムロー版と同じく *Enfer* 403を下敷きにしている。ロトリーが指摘しているように、*Enfer* 403は誤りが少ない (p. 17)。また、ロトリー版とムロー版を比較すると、改行の違いが見られる。引用のページ番号は引用文の後に示す。

その張形はある年配の女子大修道院長に頼んで手に入れたことなど、どこまでが真実かはわからないが、物語はこの事件がきわめて作為的であった様子を巧みに分析しながら描き出している。そして二人の出来事は、ヨーロッパ中に知れわたることになる (p. 99)。おそらく当時の読者なら、エラディスとディラグ神父のアナグラムは疑問の余地なくカディエールとジラルルの事件を思い起こしたことだろう。しかし、『テレーズ』が出版されたのは1748年であって、1731年のカディエールとジラルルの事件から17年も経過している。この点については、イエズス会とジャンセニストとの深い対立が持続していた40年代後半において、作者は教権全体を批判するためにこの事件を持ち出したのではないかと思われる。C…夫人の痙攣派批判が作者の立場をよく物語っている。

物語は「ディラグ神父とエラディス嬢の物語」から突然「C…夫人とT…神父の話」に移る。テレーズがディラグ神父とエラディス嬢との性行為を二人に語るという脈絡はあるものの、「C…夫人とT…神父の話」は一つの独立した挿話として読むことができる。また、この部分こそおそらく作者の考えがもっとも明確に書き込まれている箇所であり、『テレーズ』の中核部分と言えるだろう。その理由は、哲学的な議論にもっともページが割かれており、さまざまな当時の思想が読み取れるからだ。この点については後で触れる。また、その記述方法は性行為と哲学的な議論が交互に現れ、快楽と理性が共存している。

T…神父は宗教問題について自説を展開するが、宗教問題は「C…夫人とT…神父の話」の中でもっとも重要な箇所であろう。それはこの問題に費やされているページ数によく表れており、テレーズが「何よりも聞きたいのがこの宗教問題でした」(p. 129)と語る点でも明らかだ。また宗教問題についての議論は、当時の哲学的議論を示してもいて、時代のトピックでもあっただろう。T…神父の立場は、神の存在は認めるが、奇跡や啓示は認めない理神論に近い。宗教は人間が作り出したものであって、宗教による神は「存在するものすべての創造者であり、原動力であるたった一つの神」(p. 139)とは異なるとT…神父は述べている。こうした批判は、サドの宗教批判の過激さには及ばないが、その論理の展開の仕方には共通点も多く見られる。とりわけ人間が宗教を捏造し、また政治が宗教を考えたという論理は共通のものである (p. 139)。「C…夫人とT…神父の話」はテレーズが母とパリに行くことになり、終止符が打たれる。母とパリに出たテレーズは、借金を返済してもらうのが目的であったが、借金は返済されずさらにはヴォルノに残してきた所持品すべてがなくなったことを聞いて母が死に、パリで身寄りなく一人残されることになる。そこで登場するのが隣人の親切なボワ=ロリエ夫人であった。

第一部の終わりにボワ=ロリエ夫人との出会いの経緯と彼女がテレーズに男を紹介しようとする話が出てくる。テレーズがビデを知らなかったという話は、彼女がいかに無垢で、世間知らずであるかをよく示している。そんなテレーズにボワ=ロリエ夫人は自分の叔父であるB…氏を紹介し、さらには彼の友人の金持ちであるR…氏とともに食事をする

ことになる。食事の後、R…氏は何の駆け引きもなくテレーズを自分のものにしようとするがテレーズは応じない。彼女は犯される寸前で大声をあげ、ボワ＝ロリエ夫人に助け出される。テレーズはすっかり動転して、助けてくれたボワ＝ロリエ夫人に自分の過去をすべて話してしまう。それに答える形で、ボワ＝ロリエ夫人が自分の過去をさらけ出すと言うのが第二部である。

第二部はボワ＝ロリエ夫人の回想と侯爵との恋に物語は分かれる。ボワ＝ロリエ夫人は娼婦として生きてきたが、彼女の性器は生まれつき特殊な形をしていて、男性器を挿入することができない。まずボワ＝ロリエ夫人は自分の生い立ちを語り、彼女は高等法院院長の差し金で誘拐され、その後ルフォール夫人によって育てられるが、15歳のときにこうした過去をルフォール夫人から告げられる。翌日、ボワ＝ロリエ夫人はルフォール夫人によって高等法院院長のもとに連れて行かれ、そこで品定めをされることになる。高等法院院長は彼女が聞き分けよくしていれば何ひとつ不自由をさせないことを約束する。しかし、やり手婆のルフォール夫人はボワ＝ロリエ夫人に二人で商売をすることを提案し、ボワ＝ロリエ夫人は娼婦として生きることになる。奪えない処女が功を奏して話題になり、「五年間で五百人以上の男たちが初物を奪おうとする」(p. 161)。しかしながら、警察がそれを聞きつけて注意を受けたために、二人は噂が静まるまで身を隠し、噂が落ち着くと今度は性器に挿入せずに快楽を求めるさまざまな趣味の男たちを相手に商売を始める。男爵夫人たちとの遊びに手を貸したり、快楽を感じると大声を出す司教の快楽を助けたりというわけである。彼女によると、「体験したありとあらゆる奇妙な趣味や奇妙な行為を一覧表にするなら、私は決して語り終えることがない」(p. 166)。そこでその一覧表の一部が開陳されるわけだが、走らせることで快楽を得る貴族の金持ち、張形を使ってオナニーをするように命じられると同じ行為を真似ることで絶頂に達する男、鞭で打たれることによって精液を撒き散らす医者、鏡の部屋で鏡に映る行為を見ながら絶頂に達する宮廷人、また滑稽な三人のカプチン会修道士たちの物語などさまざまな趣味をもつ男たちが紹介される。ここでは、「自然に反する趣味」(ソドミー)について、ボワ＝ロリエ夫人はさまざまな趣味についての回想を一時中断して、自然に反する趣味について哲学的な議論を紹介する。その議論は自然に反する趣味をもつ者の一方的な主張であるが、それまでの场景描写とは異なり、作者の考えが読み取れる。

「自然に反したことをする男たちはわれわれの非難を嘲笑っているし、彼らの趣味をしっかりと守っているわ。自分たちに反対するものも自分たちと同じ原理によってしか導かれていないと主張してね。彼らのような異端者はこうも言っているわ、『われわれは、自分たちが快楽と信じる手段によって、あらゆる快楽を追求するんだ。われわれ同様にわれわれに反対する者をも導いているのは、趣味なんだ。ところで、われわれがあれこれの趣味を思いのままにできないということには、あなたも同意でき

るね。しかし、趣味が罪深いときや自然を侮辱しているときには、こうした趣味は棄てなければならないと言われている。でもそんな必要はまったくないね。快樂に関して、なぜ自分の趣味を棄てなければならないんだい？ まったくとがめられるような罪はないね。おまけに、自然に反する者と言われる人々は、決して自然に反していないだ、というのも、この快樂に対する好みをわれわれに与えたのもまた自然だからね。しかし、われわれは子供を作らないと非難を受けている。なんという間違った考えだろう！ どちらの趣味であろうと、子供を作るために肉体の快樂をもつような男が、いったいどこにいるんだい？』とね。」(pp. 179-180)

ボワ=ロリエ夫人はこうした趣味の人間をはっきりと「嫌いだ」(p. 180)と述べているが、作者は「自然に反する者」の主張を紹介することで、快樂に対する趣味が他律的であり、性は生殖のためにあるというキリスト教の考えを批判している。

最後に登場するおならを好む趣味の持ち主に対しては「女の憎むべき敵」としてその人物はさらに滑稽化して描かれているが、その男の話が終わるとボワ=ロリエ夫人の二人の知り合いが訪れたため彼女の話は中断する。そして翌日の金曜日、テレーズはオペラ座で侯爵との運命の出会いをすることになる。テレーズの論理に従うと、この出会いは必然と言わなければならないだろう。しかも、テレーズも侯爵もお互いに恋心を抱くことになる。ボワ=ロリエ夫人の話は、娼婦の世界から抜け出せなかった一番の原因であるルフォール夫人が死に、彼女がこの世界から足を洗うところで終わる。彼女は最終的にパリに戻り、豊かな年金で暮らしているところで現在に結びつく。

第二部の最後の副題である「ボワ=ロリエ夫人の話の終わりとテレーズの話の続き」は、そのほとんどが侯爵との恋の経緯とテレーズが到達した哲学について語られる。「ボワ=ロリエ夫人の話の終わり」は数行で語られ、彼女は物語の舞台から退き、侯爵が新たに登場する。侯爵はまず二人の信頼関係を築くために金の話を持ち出す。彼の条件は生涯にわたりテレーズに2000リーブルを保障するというものだ。ただし、結婚はしない。さらに、社交界から身を引いて、パリから四十里のところにテレーズとともに暮らしたいというものだ。しかし、まずは一緒に行って暮らしてみた上で決断すればいいと侯爵は言う。

「四日後には出発します。よかったら友達として私と一緒に行きませんか？ おそらくその後で、私の恋人として私と暮らすことを決めてもらえるでしょう。それは、あなたが私を喜ばせることに喜びを見出すかによるでしょう。しかしこうした決定は、あなたの幸福に役立ちうるとあなたが心ひそかに感じるかぎりでしかなされないこともわかっておいてください。」(pp. 186-187)

侯爵はテレーズとともに暮らそうと強いるようなことはしない。彼の哲学によると、

「自分が幸福になるためには、一人ひとりが自分に相応しい、自分に与えられている情熱に見合った種類の快樂を手に入れなければならない。」(p. 187) からだ。また、「隣人の幸福を傷つけないように注意しなければならない」(p. 187) というのが人間の行動原則だという。さらに、法の遵守を説く。こうした侯爵の誘いにテレーズは一緒に行くという選択をする。テレーズも侯爵の哲学に則って、彼を幸福にすることで自分も幸せになろうとするのである。新たな住まいで二ヶ月が過ぎるが、二人が性交渉をもつことはない。テレーズは相変わらずオナニーを続け、侯爵の射精を助けるが決して彼の一物を自分の膣の中に導こうとはしない。それはテレーズの幼さによるものだ。侯爵はこのようなテレーズに対して自らの哲学を語る。「私たちが生きていく中でどのあらゆる行いは、二つの原理で導かれています。つまり、多少なりとも快樂を手に入れるか、多少なりとも苦痛を避けるかだ。」(p. 191) と。また別の機会には、人間には自由はないこと、自由な考えや意志や気持ちの高ぶりは物質にその起源をもつことを語る。精神も幻想か物質の一部であると唯物論を展開するのである。相変わらず性行為を拒絶するテレーズに対して、侯爵はテレーズの頑なな態度を解すために、次のような提案をする。つまり、彼が所蔵する好色絵画と好色本を一年間貸す代わりにオナニーを二週間禁止するという提案だ。テレーズはこの提案を受け入れて賭けをするが、五日目に我慢できなくなりオナニーを始める。彼女は最初の四日間で『カルトゥジオ会修道院の門番の物語』、『カルメル会修道女の渉外担当修道女の物語』、『女たちの学園』、『聖職者の栄誉』、『テミドール』、『フレティヨン』などを読み漁るが、これらはすべてリベルタン小説で当時の人気本であったのだろう。また、侯爵は『プリアポスの祭り』、『マルスとヴィーナスの恋』の二つの絵をテレーズに貸し与えるが、これが彼女をオナニーへと導くきっかけになる。ここでは好色絵画やリベルタン小説の挿絵がどのような役割を果たしていたかがよくわかる。テレーズは最終的に欲望に誘われて、自分の膣に指を入れようとする。そのときに侯爵が現れて、二人は結ばれる。ただし、妊娠を避けるために射精はあくまでも膣の外である。そして、二人のこうした関係は十年続くことになる。最後にテレーズは自分の哲学を語るが、それはT…神父と侯爵の哲学から学び取ったもので、彼女がしっかりと哲学者として成長した証明である。

4. 『テレーズ』にみられる哲学

リベルタン小説は性とともに哲学を語るという特徴がある。『テレーズ』においても性行為の場面と哲学的な議論が交互に表れるが、そこに見られる哲学的議論をもう少し詳しく見てみることにしよう。議論と言っても、登場人物が相反する考えを読者に提示するという弁証法的議論ではなく、登場人物は作者の考えの代弁者であり、議論から読み取れるのは作者の考えである。したがってテレーズの考えもT神父、C夫人、伯爵の考えも作者が糸を引くマリオネットだ。

『テレーズ』に見られる哲学的議論の核心は、「すべては必然であり、無から結果は生まれることはない、またわれわれには選択の自由はない」という機械論的、決定論的な考え方である。T神父はC夫人に対して、この世界の生成変化を次のように説明している。

「すべては結びついていて、必然であり、偶然によって生まれるものは何もありません。賽を投げる人によって出された三つの賽の目は、賽筒の中の賽の配置や力や与えられた運動に従って、必ず決まった目になるはずです。賽の一擲は、われわれの人生のあらゆる行動の一覧表です。ある賽が別の賽に当たります、最初の賽が必然的な運動を与えているということです。運動から運動が起こって、その賽は物理的に決まった目になります。同じように人間も、最初の運動によって、また最初の行動によって、二番目、三番目、さらにそれ以降の行動が不可避免的に決定されます。人があるものを望むのはそれを望んでいるからだ、と言うことは意味を成しません、それは無から結果が生まれると仮定することです。動機や理由が人に欲しいものを決めさせることは明らかです。また、理由から理由へと次々と決められ、人間の意志は生涯にわたってあれこれの行動を行なう抵抗できない必然性があります。人生の終わりは賽の投擲の終わりなのです。」(pp. 139-140)

また、物語の最初でテレーズは屁理屈屋を仮想して「私は夕食のときにブルゴーニュワインを飲むかシャンパーニュにするか選ぶ自由はないのですかねと。」と言わせるが、その答えは「牡蠣が出されたらシャンパーニュしかない」(p. 84)、というものである。このような必然的因果関係が人間の行為を導くとするなら、それはどのように説明されるのであろうか。

テレーズの考えでは、人間の行為を導くのは欲望の度合いである。「私たちが意志や決定と呼んでいるもの」(p. 84)は、「情熱や欲望の度合いに完全に委ねられている」(p. 84)と述べた上で、この欲望の度合いは「人に生じる快楽や不快が組み合わせられたもの」(pp. 83-84)であり、「情熱や欲望の度合いが、天秤が二冊の本よりも四冊の本が載っている重い方へと当然のことながら傾くように、私たちを揺り動かしているのです。」(p. 84)と数量化された科学的合理的な考えによって説明しようとしている。またこうした欲望の度合いが生じるのは、「器官の配置、繊維の配列、体液の何らかの運動」(p. 86)によってであり、それが「情熱の種類や私たちを動かす力の度合いを生み、理性を制限し、人生におけるどんな小さなあるいはどんな大きな活動においても意志を決定する」(p. 86)という。『テレーズ』に内包されているのはこのような機械論的な世界観であり、そこには当然のことながら曖昧さを排除しようとする意思が見られる。たとえば「自然」についても「意味のない言葉」として排除される。

「自然」について、テレーズは「一律」(p. 86)で「不変の法則」(p. 113)と述べる一

方、「自然の法則は神が創ったもの」(p. 113)として自然と神の関係を規定している。また、C夫人が神を「気高き自然」(p. 126)と言ったことをT神父が批判して、「自然は架空の存在で、意味のない言葉」(p. 126)として斥ける。またテレーズは「神と自然は同じものだ、あるいは少なくとも自然は神の直接的な意思によってのみ動かされる」(p. 129)と述べ、T神父は「この自然が確実に働くのは神の意志によってなのです」(p. 138)と「自然」に重要な役割を与えていない。そして、最後にテレーズが到達する「自然」についての考えは、「自然とは絵空事」(p. 197)という結論だ。つまりこの世界の運動を説明するには「万物の創造主であり、支配者である」(p. 138)神の存在のみを認めればよく、自然は神が与えた法則でしかない。しかし、ここで問題となる「神」はあくまで「万物の創造主、支配者」としての神であって、宗教的な神とは何ら関係がない。T神父は宗教的神について熱弁を奮っているので彼の論理を見てみよう。

まずT神父は「神がいるところには宗教があると言われています。しかしながら、世界が創造される前に、神はいたけれども宗教はなかったことは認めなければなりません。」(p. 137)と述べて、「創造主としての神」と「宗教的な神」をはっきりと区別している。また、「ありとあらゆる宗教は、一つ残らず人間が創り出したものです。」(p. 138)と述べ、こうした宗教が生まれた理由については、雷、嵐、風、雹などの天災への恐れによるとしている。世界のさまざまな宗教がT神父の批判の対象だが、その中でもキリスト教に矛先が向けられる。「完全なキリスト教徒になるためには、無知になり、盲目的に信じ、あらゆる快楽や名誉や富を棄て、両親や友人を見捨て、処女性を守り、一言で言えば自然に反するあらゆることを行なわなければなりません。しかしながら、この自然が確実に働くのは神の意志によってなのです。宗教は、これほど正当で善良な存在の中に、なんという矛盾を思い描くのでしょうか！」(p. 138)というわけだ。また、T…神父と同様にテレーズも、神の存在は認めるが、奇跡や啓示は認めない理神論へと到達する。

さらに『テレーズ』では、幸福を追求する個人と社会との関係にも言及されている。「自分が幸福になるためには、一人ひとりが自分に相応しい、自分に与えられている情念に見合った種類の快楽を手に入れなければなりません。善悪やこの快楽の享受から生ずるものを組み合わせ、またこの善悪は自分自身だけではなく公共の善悪について検討されているかもよく考えなければなりません。」(p. 187)という伯爵の言葉は、キリスト教による共同体としての人間の幸福から私的な個人としての幸福の追求であり、社会の中の個人を見つめている。またここから導き出される、「隣人の幸福を傷つけないように注意しなければならない」(p. 187)という考えは、キリスト教の隣人愛とは異なった社会に生きる個人としての隣人の幸福の尊重として読める。したがって当然のことながら、伯爵の結論は「一人ひとりがこの世界で幸福に生きるために追い求めなければならない最初の原理は、誠実な人間であることと、人間の作った法律を遵守することです。」(p. 187)という法の遵守に至るのである。

ではテレーズ自身は最終的にどのような考えに到達したのだろうか。最後のテレーズの言葉は、いわば本書の哲学のまとめであるのでもう少し詳しく見てみることにしよう。まず彼女は世界の創造主として神の存在を認める。その一方で「自然」とは人間が作り出した絵空事として退ける。また、宗教も創造主としての神とは何の関係もなく、人間の想像力が生み出したものでしかないと考えている。われわれに欲求をもたらすのは神であり、したがってわれわれが恥じるべき欲求は存在しない。それは性的欲求も例外ではないことになる。このように考えると、われわれには意志はなく、われわれの行動にも個人の意志の自由は存在しないことになる。こうしたテレーズの行動原理を論拠づけているのは、感覚論であり、唯物論だ。「魂は意志をもっておらず、感覚によってしか、また物質によってしか決められないのです。理性は私たちを啓蒙しますが、決して私たちに決定させられないのです。自愛心（快樂を望むあるいは不快を避ける）は私たちのあらゆる決定の原動力です。」(p. 197) というわけだ。さらに法律の遵守も説いている。その理由は、「違反者を罰することは社会全体の安定に貢献するから」(p. 198) という公益を重視するからである。そして最後には、社会の上に立つあらゆる人々は万人の幸福のために行動しているのだから、愛し、尊敬しなければならない、と身分制度を肯定するような考えで締めくくられる。

ところで、テレーズの考えには矛盾も見られる。われわれの欲求は神によって吹き込まれた自由のないものであると言いながらも、行為の決定原動力は感覚であり、物質であると言う。そこには決定論と唯物論が共存していて、唯物論が主張されているが、神の存在を認める矛盾が内包されている。また最後の身分制度を肯定するような考えは、おそらく作者が上流階級に属する者であることを示すものだろう。また、テキストでは「考えることができるように生まれてこなかった人々」(p. 119)、「器官の働きが悪い人々」(p. 198)を「考えることができる人たち」(p. 141)とはっきり区別し、実際に自分の頭で考えることができ、情熱に支配されていない人は十万人中四人もいないと主張して、馬鹿者たちに真実を知らせることには十分用心する必要があると述べている (p. 141)。このような考えはヴォルテールにも見られ、18世紀前半の思想家たちにとってはある程度共有されていた考えである。こうした点から、『テレーズ』のメッセージはあくまで上流階級のしかもしベルタン思想を理解する読者に向けられていると考えられる。ではこうした考えはどこから来たのだろうか？ 作者が吸収したそれ以前の作品とはどのようなものなのだろうか？

最近の『テレーズ』研究から、作者はデュマルセ (César Chesneau Du Marsais) の『宗教の検討あるいは誠実な説明が求められる宗教についての疑問』(*Examen de la religion ou Doutes sur la religion dont on cherche l'éclaircissement de bonne foi*) (以下『宗教の検討』) から多くを引用していることがわかっている¹⁷⁾。とりわけ、先に述べたT…神父が

17) ロバート・ダーントンは『禁じられたベストセラー』の中でテキストを比較しながら両者の類似を指摘し

語る宗教批判はその多くをデュマルセに負っている。また、テレーズは「こうした治療法は、機械の調子を狂わせましたが¹⁸⁾、本当に突然熱狂の病から私を治してくれました。」あるいは「私は25歳のときに修道院からほとんど死に掛けた状態で母に救い出されました。あらゆる機械が不調になり、顔色は黄色になり、唇は蒼白になっていました。私は生きた骸骨のようでした。」と述べているが、人間の体を機械と見るのはラ・メトリーの『人間機械論』から多くを負っている。さらに、「唯一の肉体的快楽、苦痛を伴うことなく味わうことができる唯一の快楽を私たちにもたらすこの神聖な体液は、私たちが栄養の流れによって養われているように、体液の流れはある種の体質には必要なのですが、その体液にふさわしい管からふさわしくない管へと逆流して、このことが原因で機械全体が混乱に陥っていたのでした。」と快楽を物質の数量化による説明はラ・メトリーの魂は物質ではないという考えを想起させるし、「私たちは独自な方法で考える自由はない」¹⁹⁾ という考えも『人間機械論』や、デカルト、フォントネル、ロシュフーコー、マンドヴィルなどを取り込みながら哲学者テレーズの考えを作り出している。テレーズの哲学の源を探ることは、思想の流れをこの作品がさまざまに取り入れているだけに、またこの作品が多くの影響を与えているだけに面白い問題である。本論ではこれ以上立ち入らないが、ロトリーの詳細な注がこうした研究に役立つことは指摘しておきたい。

5. 『テレーズ』とサドの『閨房哲学』との類似

また、『テレーズ』はよく読まれただけに後世への影響も大きく²⁰⁾、入口の問題だけではなく、出口についても面白い問題を提起している。後世への影響の中でも、とりわけサドの『閨房哲学』には『テレーズ』のさまざまな影響が流れ込んでおり、物語の設定においても共通点が見られる。たとえばテレーズと『閨房哲学』の主人公であるウジェニーがともに無垢な娘であって、テレーズがC…夫人やT…神父の議論から女哲学者へと成長する物語の設定が、ウジェニーがドルマンセやサン・タンジュ夫人にリベルタンになるための教育を受けて成長し、最後には揺るぎないリベルタンになるという物語に類似している。また、『テレーズ』と『閨房哲学』はその記述方法も類似しており、哲学的議論と性描写が交互に現れるパターンがその類似をよく示している。

しかしこうした類似にも関わらず、二つの作品は半世紀の時間を経て、サドによってよ

ている。彼は『テレーズ』の著者の考えは、『宗教の検討』の理神論的な神の穏健さとは縁もゆかりもないと述べているが、T…神父の考えもテレーズの考えも理神論的であり、より過激な味付けはなされているが両者の間にダーントンが言うほどの変質があるとは思われない (Robert Darnton, *The forbidden Best-Sellers of Pre-Revolutionary France*, W. W. Norton & Company, 1996, p. 108. 邦訳『禁じられたベストセラー』、近藤朱蔵訳、2005、pp. 155)。

18) ここでは体を機械に見立てている。デカルトの動物機械論、ラ・メトリーの人間機械論を下敷きにしている。

19) Lotterie, *op. cit.*, p. 203, note 19.

20) *Ibid.*, pp. 7-8.

り過激に味付けされている。例えばそれは次のような箇所によく現れている。

「神はいかなる情熱にも従わない、と理性が私に教えてくれます。しかし、「創世記」の第六章で、神は人間を創ったことを後悔し、その怒りは効き目がなかったと神に言わせます。キリスト教では神は非常に弱々しく現れるので、神は自分が思うように人間を操ることができません。それで、神は人間を洪水で、それから火で罰しますが、人間は相変わらず同じです。神は預言者を送りますが、それでも人間は変わりません。神にはひとり息子しかいませんでした。その息子を送り、犠牲にしますが、それでも人間は何ひとつ変わりません。キリスト教は神に何と滑稽な役割を与えたのでしょうか！」(p. 135)

「この汚らしい宗教上の神は、今日一つの世界を創造したかと思えば、明日にはその出来栄を後悔するという矛盾し、野蛮な存在でないとしたら、いったい何だろうか？ 決して人間を自分の思いどおりの姿にできない弱々しい存在でないとしたら、何だろうか？ 人間は、神から出たものであるのに、今では逆に神を支配しているのではないか。神を侮辱し、そのために地獄の責め苦を受けることも人間にはできるのだ！ なんと弱々しい神であることか！ われわれが現在目にしているあらゆるものを創ることができたのに、一人の人間さえ自分の思いどおりに作れなかったとは、何としたことだ！」²¹⁾

サドは『テレーズ』を批判的に読むことで、自らの考えを深化させていったのではない。とりわけ『閨房哲学』にみられるキリスト教批判は、『テレーズ』の批判とは比較にならないほど激烈である。おそらくサドにとっては、『テレーズ』における批判は生ぬるいと映ったに違いない。しかし、サドは『ジュリエット物語』の中で、好色本について触れているが、その中で『テレーズ』だけは評価している。

「そこにあったのは猥褻な版画と著作の山でした。最初に目に付いたのは『カルトゥジオ会修道院の門番の物語』でした。それは好色文学であるにも拘らず素朴で真面目な作品なのですが、噂によると、著者は臨終の床で自作であることを否認したのだそうです……何と愚かなことでしょう。人生の最後の瞬間に自分が言ったことや書いたことを悔い改めるような臆病な人間など、後世の人達の記憶から消えるのは当然だわ。二冊目は『女たちの学園』でした。構想はいいけれども、仕上げが拙い作品で、臆病な作者は真実に気付いているのにあえて真実を述べることを憚り、うるさい

21) *La Philosophie dans le boudoir, Œuvres Sade*, t. III, Bibl. de la Pléiade, pp. 28-29 (Cf. Lotterie, *op. cit.*, p. 211, note 89).

お喋りばかりしているのです。三冊目は『ロールの教育』で、間違った考察に基づいた、明らかな失敗作でした。著者は妻殺しを匂わしながらはつきりとそれとは言わず、近親相姦の周りを廻るだけで一向にそれを告白しないのです。好色な場面がもっと欲しいし……序文の中では残酷な趣味を暗示しているのに、その光景を描写していないのです。そうした欠点がなかったら、想像力に富んだ楽しい作品になったことでしょう。私は、物事を中途半端に抑制してしまう臆病者は大嫌いです。私達に考えを示すだけでその半分も実行しないのなら、何も書かない方がずっとましなのです。四冊目はアルジャン侯爵の筆になる魅力的な作品『哲学者テレーズ』でした。これは目的を明らかにしていながらその一部分しか実現させていませんが、淫楽と不敬虔を巧みに結び付けている唯一独自の作品で、たちまち人々の間で読まれ、作者が当初考えていたように、最終的には不道德な本になるでしょう。]²²⁾

「淫楽と不敬虔を巧みに結び付けている唯一独自の作品」として、サドがいかに評価していたかをこの箇所はよく物語っている。「不敬虔」(impiété)という語を使いながら作品を評価していることから、『テレーズ』の中でもっとも激しく攻撃される宗教批判にサドが惹かれたと思われる。また、サドは曖昧な記述を批判もしている。性行為の描写も直接的で、ヴェールを被った記述は彼の好みではない。ロトリーも『閨房哲学』と『テレーズ』の用語の違いに注目している。クリトリスは『閨房哲学』ではクリトリスという語を使い、そこには何のコノテーションもみられないが、『テレーズ』では「突起」あるいは「幸せな発見」と言う表現が用いられ、サドの「革命のメッセージ」に対して、『テレーズ』の「穏やかな解放のメッセージ」と述べている²³⁾。そこには半世紀の時間差があり、『テレーズ』はクレビヨン・フィスの作品と同じ時間を共有していることがわかる。しかし、こうした表現の曖昧さに関わらず、『テレーズ』は曖昧さのない覗き見としての性行為の観察眼とそこから導き出される過激な思想がサドを惹きつけたのだろう。

6. 結びにかえて

では最初の問いに戻ろう。リベルタン小説、とりわけ本論の対象である『テレーズ』はフランス革命に何らかの影響を与えたのだろうか？『テレーズ』という一作品から結論を導き出すのは危険であるが、ここでは『テレーズ』が与えた影響が18世紀後半にどのように受け継がれたのかに注目してみたい。それはまた『テレーズ』を含むリベルタン小説のその後の行く先を見ることでもある。

『テレーズ』は教会内部の権力をもった者が、無垢な信徒の信仰心を巧みに利用しながら

22) *Histoire de Juliette*, *ibid.*, p. 591.

23) *Lotterie*, *op. cit.*, p. 64.

ら自らの性的欲望を満たそうとするカディエール・ジラル事件をテーマにしているだけに、スキャンダラスな読み物として読者を惹きつけたに違いない。『テレーズ』の面白さは、当時の読者にとってはおそらく実話としての面白さにあったのではないか。事件からすでに17年も経過して出版されているが、すでに述べたようにイエズス会とジャンセニストとの対立は当時なお続いており、スキャンダルに飛びつく現在も変わらない大衆心理があったと思われる。それは革命に近づくにつれますますます顕著になり、批判の対象もデュバリ夫人やルイ15世へとエスカレートしていく誹謗文書によく見られる。大衆嗜好という点では、挿絵が果たした役割も無視できない。本論では触れなかったが、『テレーズ』の多くの版は挿絵入りであり、しかも物語に即して多くの版画が刷られた。挿絵は読者の欲望を掻き立てるとともに、文字が読めない者までも惹き付ける。また『テレーズ』の面白さは、宗教批判と唯物論のインパクトにもあるだろう。作者が「暗黙の読者」として想定していたのはおそらく上流階級 (le monde) の読者層であったと思われるが、モンティニがフランス軍兵士に売ってひと儲けを企んだように、読者層も広がるとともに変質していたに違いない。T…神父が自ら語る宗教批判は『テレーズ』の中では圧巻だが、こうした批判を受け入れる公衆がすでに育っていたことを抜きには考えられないからだ。その背景には、これまでの家族や教会にしっかりと根を下ろした共同体社会から、個人に根ざした社会関係への変化が基盤にある。ジェイコブも指摘しているように、こうした個人は出自、親戚関係、職業などの伝統的な集団や組織としての一員としてではなく、個人としてカフェ、居酒屋、サロン、フリーメーソンの集會場で社交するようになった²⁴⁾。こうした新たな公衆が『テレーズ』の読者を構成していたものと思われる。『テレーズ』は1748年の初版以降も新たな版が何度も刷られ、さらには新たな挿絵も加えられ、よく読まれたという点からも、挿絵が豊富な点からも、『カルトゥジオ会修道院の門番の物語』とともにリベルタン小説の中核的な役割を果たしているように思われる。

『テレーズ』とフランス革命の直接的な影響関係を明示することは難しいが、読者層の広がりや変質によって新たな公衆が生まれ、こうした人々が教会権力や国王権力の批判の一翼を担ったと考えられる。彼らが批判の理論的根拠としたのが科学的合理主義思想であり、唯物論哲学であった。その意味では『テレーズ』に見られる唯物論哲学は公衆の意識変革に影響を与えた可能性は高い。リベルタン文学が検閲の対象になり、作者や出版関係者が逮捕、投獄されたのは、リベルタン文学が伝統的な階層秩序を覆す力になることを権力が恐れたからであろう。『テレーズ』の場合も、モンティニやボシュロンという出版に関わった人物の逮捕にまつわる警察調書が、リベルタン文学に対する警察の態度を図らずも明らかにしている。ジェイコブは唯物論的ポルノグラフィーである『テレーズ』は、

24) Margaret C. Jacob, «The Materialist World of Pornography» dans *The Invention of Pornography*, p. 159 (邦訳、マーガレット・C・ジェイコブ「ポルノグラフィーの唯物論的世界」『ポルノグラフィーの発明』、pp. 167-168)。

「個人主義、情熱や利害関係、自由や社会に対する非順応、不敬と秩序転覆を語る唯一の自然哲学」²⁵⁾ の書物であると高く評価しているが、スキャンダルを扱った読者の好奇心をそそり、唯物論を吹き込みながら読者の怒りを生み出すという点では、革命への直接的影響は別にして18世紀後半に与えた影響は大きかったと考えられる。

またダーントンは「哲学書」を過小評価してはいけないという。とりわけ、性を媒体にした聖職者批判、あるいは王権批判はエリートより下のレベルで世俗化＝脱神話化を引き起こしていたにちがいないと推測している²⁶⁾。確かに、『社会契約論』よりも「哲学書」がよく読まれていたというのは、誹謗文書の顕著な増加にも見られ、またパリの公衆の欲望にも合致していたといえる。リベルタン小説は「性と哲学」を結びつけることによって民衆の怒りに論理を与え、しかも民衆の欲望に受容されやすい形式であったのだ。というのも、性は読者の欲望を掻き立てるとともに不正への憎悪も掻き立て、哲学はそれを論理化するとともに言語化するからだ。

では『テレーズ』に見られるような「性と哲学」が一体となったりリベルタン文学はなぜ生まれたのだろうか？ リベルタン文学が教会批判や政治批判を含む非合法なものであることはすでに述べたが、こうした批判がどうして性と結びついたのだろうか？ そこにはフランス18世紀がもつ時代精神も大いに関係していると思われる。オルレアン公の摂政時代やルイ15世の時代はブシュやフラゴナールの絵画に見られるように色好みの時代精神を表わしている。フランス18世紀は理性の世紀と言われるが、理性とともに快楽の世紀とも言える。しかし18世紀が快楽好みの世紀であるにしても、それは18世紀だけのことだろうか？ 19世紀には確かにフランスでも（とりわけイギリスで）、性について厳しいブルジョアモラルの時代であったが、警察が取り締まれば取り締まるほど、性的欲望は地下に潜り、より強固に生き残ったことをヴィクトリア朝時代は教えてくれる。それは現在でも同じことであり、禁止すればますます成功するという図式は変わらない。ではこうした性と哲学、快楽と理性の結びつきには普遍性があるのだろうか？

快楽と理性は一見すると相容れないように思われる。というのも、快楽は性・祭り・動物的・暴力的・非言語・無秩序と結びつくのに対して、理性は哲学・労働・言語・秩序・平穏と結びつくからだ。しかし、テレーズは欲望がどのようにして生まれるのかを哲学によって教えてくれる。それは「器官の配置、繊維の配列、体液の何らかの運動」(p. 86)によって生じ、それが「情熱の種類や私たちを動かす力の度合いを生み、理性を制限し、人生におけるどんな小さなあるいはどんな大きな活動においても意志を決定する」(p. 86)と言う。人間の意志の決定についてテレーズの考えは一貫していて、「天秤の重さ」が決めるのである。したがって数量化される欲望が人間の行為を決めるというテレーズの哲学においては、欲望することと哲学することは矛盾なく共存している。欲望が理性に

25) Jacob, *ibid.*, p. 192 (邦訳、p. 200)。

26) Darnton, *The Literary Underground of the Old Regime*, p. 205 (邦訳、p. 265)。

よって説明されることで、欲望と理性が融合している。いやむしろ、欲望は理性によってより強い刺激を受けることをサドのアパテイアの精神がよく示しているのではないか。快楽は理性によって高められるのだ。それは読書行為においても同じである。テキストや挿絵が欲望を喚起するためには理性つまり想像力の介入が必要だ。裸体よりも隠された肉体が欲望を刺激するように想像力によって欲望はより掻き立てられるからだ。こうした点から、『テレーズ』は18世紀の啓蒙の世紀の特徴である欲望と理性の結びつきをサド以前にはからずもよく示していると言えるだろう。

また、性的欲望はあの世の精神世界をこの世の現実世界へと視点を移動させる力をもっている。肉体は死後の世界から、現世への関心をもたらし契機となるからだ。こうした現世の快楽への視点の移動は、あの世に価値を見出すキリスト教世界への批判を生み出していったのではないか。この変化に唯物論哲学が果たした役割も無視できない。したがって快楽と理性は共犯者であっても、対立するものではない。この点でも、リベルタン文学が変化の力として果たした役割は大きいものがあると言えるだろう。

リベルタン文学がフランス革命とどのような結びつきがあるのかは、より詳細な検討を加える必要があるだろう。しかしながら、1789年に向かって「政治的ポルノグラフィー」の出版数が増し、1789年以降その数は飛躍的に増大したという。リン・ハントは「革命初期の数年間、政治的に動機づけられたポルノグラフィーは猥褻印刷物の約半数を占める」²⁷⁾ と言っているが、こうした状況はリベルタン文学の役割を過小評価してはならないことを示している。こうした点を踏まえて、今後は『テレーズ』だけではなく、それ以外のリベルタン小説を紹介するとともに、それぞれの作品がどのような意味をもつのか、リベルタン文学が18世紀後半においてどのような役割を担ったのかについても検討を加える必要がある。

追記

本研究は、「18世紀フランスのリベルタン文学と版画の研究」を研究課題として、日本学術振興会科研費平成19～22年度の助成を受けて行われたものである。

27) Hunt, *op. cit.*, pp. 320–321.

Un roman libertin du XVIII^e siècle: *Thérèse philosophe*

Kazuhiko SEKITANI

Qu'est-ce qu'un roman libertin? Quelle différence y a-t-il entre un roman libertin et un roman pornographique? Ce terme même de roman pornographique s'applique-t-il à la littérature du XVIII^e siècle ou plutôt faut-il dire que ce genre n'existait pas à cette époque? Le mot « libertin », qui vient du mot latin « libertinus », contient historiquement le sens de « libre pensée en opposition au christianisme » et par la suite de « débauche ». Pour respecter le sens historique, nous devons donc définir « le roman libertin » compte tenu de ce sens de *révolte* et d'*obscénité*. Dans cet article nous traitons l'un des romans libertins les plus connus et les plus lus au siècle des Lumières: *Thérèse philosophe*. Pourquoi *Thérèse* a-t-elle eu tant de lecteurs? Quel était son intérêt pour les lecteurs d'alors? Cette œuvre a-t-elle exercé une influence sur son époque? Et quelle influence? Les idées contenues dans *Thérèse* ont-elles influencé la Révolution française? Quant au texte de cette œuvre, nous y rencontrons alternativement scènes érotiques et idées philosophiques. Pourquoi le sexe est-il mis ainsi en rapport avec la philosophie? Existe-t-il un rapport universel entre les deux? Ce sont ces questions que notre article a pour objet d'envisager à travers une lecture de *Thérèse philosophe*.

Nous examinons ce roman libertin selon l'ordre suivant : le problème de l'édition originale et celui de l'auteur, la structure et le contenu du roman, les idées philosophiques qu'il met en jeu, les ressemblances entre *Thérèse* et *La philosophie dans le boudoir* de Sade. Notre attention a surtout été retenue par ce que l'on pourrait appeler, d'une part, le captage d'idées philosophiques qui étaient dans l'air du temps et que le roman fait entrer en scène et, d'autre part, leur relance vers d'autres œuvres.

Un examen de ces questions montre que ce roman a exercé une influence sur un public de type nouveau qui se développe de plus en plus au cours du XVIII^e siècle. Cette influence est certainement liée à la philosophie matérialiste qui met en question les valeurs chrétiennes. Le sexe a également contribué à détourner le regard de l'autre monde pour le tourner vers ce monde ici-bas. Le plaisir sexuel nous amène en effet à porter nos yeux sur le monde réel. Ce déplacement de point de vue conduit à critiquer le christianisme qui voit dans l'autre monde la seule vraie valeur. Et c'est un fait qu'il est impossible de négliger le rôle du matérialisme dans ce déplacement. On pourrait conclure que le plaisir et la raison ne sont pas opposés, mais plutôt complices. Ainsi la littérature libertine aura-t-elle constitué une force pour changer la perception du réel au XVIII^e siècle.